



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.139

2015.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

42

『中央道用地内遺跡の協議と 長野県方式』発掘調査になるまで

『国土開発縦貫自動車道建設法』により中央自動車道の路線が発表されたのは41年でした。12月14・15日 文化庁は中央道関係主管課協議会をもち分布調査は各県で実施・設計段階で公団と直接交渉するとなった。42年8月から下伊那・上伊那・諏訪地区の分布調査をし、147・112・90計349遺跡を確認した。私は下伊那で参加した。43年4月 私は中央道遺跡調査主任に学校現場を離れるが用地買収が進んでいなく県教委に入った。この年10月山梨・長野・岐阜三県による文化財対策協議会をもつが山梨は公団八王子支局・長野と岐阜は名古屋支局と違いがあり、さらに調査が始まっている岐阜の対応と長野の望む調査体制とは大きな隔たりがあった。岐阜は調査主任が時々現場指導したり、県外から主任を招いて対応していた。長野はきちんとした調査団を組織して全ての遺跡の調査をする方針だが、県に調査する体制は無く、検討の結果45年4月県教委・地教委・学識経験者・考古学研究者で中央道遺跡調査会を組織し、会長に県教育長となり、その下に調査団を設置して調査することになった。調査団は団長に考古学研究者大沢和夫先生となり、主任に県教委指導主事が、私と増員された今村善興先生、調査員に専門研究者を、林茂樹先生が大学で考古学を専攻していた若手で42年に確保して再就職しないで残っていた遮那藤麻呂・土屋長久・矢口忠良君三人と地元の考古学研究者佐藤魁信・木下平八郎も調査員、考古学を専攻している地元出身の大学生酒井幸則・市沢英利君を補助員にとなった。

具体的には45年6月公団名古屋支社と協議、9日下伊那の教育委員会と打ち合わせ、11～12日阿智・県・飯田・上郷の現地協議、29日上伊那の教育委員会と打ち合わせ、30日諏訪の教育委員会と打ち合わせ、7月

8～10日伊那・宮田・飯島の現地協議、17日下伊那教育会と会館内に調査団本部設置について協議、22日中央道遺跡調査会発足式、8月22日下伊那教育会南別館内の調査団本部に私の家族と調査員が引越し、26日調査の打ち合わせ、28日阿智村教育委員会と打ち合わせ、9月1日調査団結成式と慌しい三ヶ月でした。9月2日阿智村川端遺跡で中央道埋蔵文化財発掘調査鍬入れ式を、公団関係者・県教育委員・県会議員・地元教育委員会・調査会理事・調査団等が参列して挙行されて、発掘調査が始まった。阿智地区7遺跡を3日から22日の実働15日間の調査を2班に分かれてするが、雨天で作業中止が4日もあったり、最初の調査ということの不慣れや、予算が限られていたこと、予想より多い遺構の発見もあって大変だった。公団側も最初の調査ということで現場に立会い計画書との確認と厳しく、巻尺をもって実測することもあった。22日からは飯田市の遺跡調査が始まる計画となっていて何としても阿智地区の調査を完了しなければならなかった。そのため当初予定していた「おち遺跡」の調査をやめたり、杉ヶ洞遺跡の調査も十分な調査を済ませることが出来なく、A班は飯田地区調査の準備に移動した。金銭的にも時間的にも余裕の無い中央道遺跡調査の開始で心残りの多い阿智地区の調査でした。

ともあれ、県教委・地教委を中心にした準公的な遺跡調査会と考古学研究者であった教員を調査主任に、考古学専攻した卒業生の調査員と考古学専攻の学生や地元の研究者の調査補助員とで組織した遺跡調査団は他県には無い専門的な調査体制であって『長野県方式』と呼ばれた。この調査団は『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針』に基づいて調査を進めた。この調査方法で地教委担当者に「埋蔵文化財調査実施講習会」を持って好評でした。

調査が始まった9月4日からB5版ガリ刷り調査速報の発行を本部に合宿する調査員と補助員に義務付けた。47年11月10日まで410号を刊行し作業員に配布し、少ないときは70部、多いときは300部を印刷し昼休みのひと時の話題提供で好評でした。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲調査速報より



▲鍬入り

目次

■田舎考古学人回想誌 中央道用地内遺跡の協議と『長野県方式』発掘調査になるまで 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト (第132回) 神田和彦 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第5回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「岩波講座 日本考古学」1 研究の方法 新宅輝久 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第5回) 岡田 淳子

⑤東大人類学教室

人類学科の大学院へ行こうと決めたときには、その年の入学試験はすでに終了していた。試験が前年の12月に行われることを、私はその時まで知らなかった。いくら努力をしてきたとはいっても、文学部から理学部に移るのだから、基礎的なものから学びなおす必要がある。私は人類学科の研究生になって1年間、受験勉強をすることにした。

受験勉強といっても学部生と一緒に受講しながら、人類学の基礎を学ぶというもので、学史、人種を見極めるための生体学、ヒトの歴史を紐解く骨学などを学ぶ得難い一年になった。

はじめは驚きの連続である。理科Ⅲ類から上がった学部生たちと、専用の教室で顔合わせの会があった時のこと、何か質問があればというので、私は大学院生の研究テーマを訪ねてみた。一人が「男女の違い」をテーマにしているということで、その後、それについて教室挙げて喧々諤々、私はあっけにとられて聞いていた。小一時間して、男と女の違いは骨にしてみなければわからないという結論に収まった。生体の方が一目瞭然と思うのに、人類学の専門研究者たちはユークリッドだと思った。

議論の内容が分かってくると、この様な場が実に楽しい。週に一度、教室に全員集まって行う「談話会」が毎週楽しみで、水曜の午後が待たれた。

数人しかいない学生が、お互いにモデルになって行う身体計測の実習。これは動物学ご出身の須田昭義先生のご担当であった。女性は私だけなので、男女の特徴となると私が女性のモデルになる。骨は女性の方が細いというモデルになったはずなのに、私の方が屈強な男子学生より骨が太くて、周囲を悩ませたこともあった。目鼻口耳、手足の計測が終わって胴体になった時、どうしようかと真剣に悩んだ。当日、教室に行くと、均整のとれた裸婦の職業モデルさんが来ていて、ああ、助かった。お相撲さんの「腹壁脂肪の厚さ」は6センチもあって驚愕。こんなことの連続だった。

1950年代の人類学の基礎は、人種を見極める研究がまだ続いていて、皮膚や目(虹彩)の色を同定することから始まる。コーカソイド(白色人種)は北欧で最も白く、南に下がるに従って色を生じ、虹彩の色も呼応して青から緑へと変わってくる。頭髪の形状は、髪の毛の断面で決まることも知った。モンゴロイド(黄色人種)にも、ネグロイド(褐色人種)にもさまざまな色があり、大きさや体形も違う。血液型はABO式だけでなく、CDE式、S,s式なども調べるが、地域によって割合の違いはあっても、性格が表れるような証拠はない。

しかし、人種はいくら細かく記述しても区別しきれるものではなく、それが人種差別を生み出してしまふこと、グローバル社会では交配が重ねられていることから、今では研究の基礎ではなくなった。

主任教授の鈴木尚先生は医学部のご出身、医学博士で骨学がご専門、鎌倉材木座から出土した中世の夥しい遺骨や、徳川家の墓所移転に伴う芝増上寺の遺骨、奥州藤原三代の

骨など、次々に調査研究をされていた。「人類」はこれから進化する方向が好まれて流行になる。だから身長は高い方が、鼻も高い方が好まれると言うわけだ。納得できる説である。明石原人の再調査を終えた前主任教授の長谷部言人先生も時々顔を出され、私に対しては山内清男先生を挟んで、民族学で言う隔世代間の関係が成立していたようであった。「山内君は石器の研究をしないのがいけない」と、いたずらっぽく言われ、米国直輸入の「文化人類学」という語彙に対し「人類学に形容詞は要らない」という険しい先生とは別人のように感じられた。

山内先生は旧帝国大学の姑息な規則により指導教官になれず、私の指導教官は鈴木尚先生であった。山内先生は廊下の端に研究室を構え、そこを本拠にして縄文文化や土器の研究を続けられていた。私は3年間、学生としてここで学んだが、その時の先生との研究室暮らしの日々については「山内清男先生没後25周年」に編まれた『画龍点睛』に載せてある。山内先生は私が入学して間もなく、文学部の八幡一郎先生と、教養学部の石田英一郎先生に挨拶をして来るようにと言われた。研究のための常識はお持ちの方だったと思う。

人類学は理系の実験講座だったから常に二人の助手がいて、当時の助手は渡辺直経先生と近藤四郎先生のお二人であった。渡辺直経先生は考古学に関係する研究として、土中の遺構を探るための「地磁気」利用と、「年輪年代学」の研究を進めていた。前者はすでに一定の成果をもたらし、後者はその後本場のアリゾナ大学へ行かれて、樹木の多い日本でも役立つに相違ないと思われた。近藤四郎先生は二足歩行をする唯一の動物、人間の踵の骨や機能を研究されており、靴の企業(大塚製靴)とタイアップして、人類の生活に役立つ方向を探っておられた。お二人からも多くを学んだ。

私は、人類学教室でお世話になった研究生と大学院修士課程の間に視野が広がり、日本史だけではなく、広く人類史を探りたいという思いが次第に強くなっていった。



▲自分で縫製した発掘着で土器を掘る
左利きの筆者(取材記者による撮影)

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Jレエッセイ

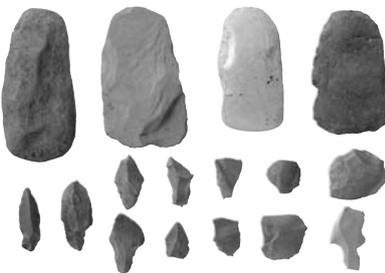
マイ・フェイバレット・サイト 132

地蔵田遺跡 ～秋田県秋田市～

神田 和彦

地蔵田遺跡は秋田平野南部の御所野台地に所在する。開発に伴い秋田市教育委員会により昭和60年(1985)に発掘調査され、旧石器・縄文・弥生時代の複合遺跡であることが判明した。遺跡は弥生時代遺構の集落跡が平成8年に国指定史跡に指定され、平成13年度(2001)から史跡整備を行い、現在は「弥生っこ村」の愛称で親しまれる史跡公園として保存・活用されている。

地蔵田遺跡は弥生時代遺跡としての価値が認められているが、旧石器時代資料も貴重であることが調査当初から旧石器研究者の間で指摘されていた。昭和61年(1986)に地蔵田遺跡の調査報告書が刊行されていたが、旧石器資料については概要報告にとどまっていた。資料の貴重さを鑑み、秋田市教育委員会は平成22年度(2010.4～2011.3)に緊急雇用創出臨時対策基金を活用し再整理事業を実施し、旧石器時代編の正式な報告書を刊行した。再整理の結果、地蔵田遺跡の旧石器時代資料は、①C14年代値で約28,000～30,000yrBP(未較正)であること、②石器分布は環状ブロック群を呈すること、③中心ブロックにナイフ形石器等のツール類が集中すること、④使用痕分析により中心ブロックのナイフ形石器に衝撃剥離が特徴的に認められ、刺突に用いその場に廃棄されたと考えられること、などを指摘することができ、後期旧石器時代前半期の居住形態に関わる重要な知見を得た。上記の②～④をふまえ、本報告で使用痕分析を行っていただいた東北大学准教授 鹿又喜隆氏は、環状ブロック群の形成要因について「大型動物狩猟仮説に基づいた解釈が、地蔵田遺跡では一定の妥当性を示す」と指摘している。



▲地蔵田遺跡出土旧石器

私が地蔵田遺跡の旧石器資料を初めて見たのは、大学院生の頃だった。当時研究室の先輩であった鹿又先生達と秋田市で旧石器資料の見学をした。特に地蔵田遺跡の旧石器は学術的価値が高いと感じたので、当時対応してくれた職員に「素晴らしい資料なので是非、報告書を作って欲しい」と生意気にも意見した記憶がある。その後、偶然にも秋田市の専門職として採用され、当時対応してくれた職員が上司となった。20代は必死に仕事をした。一般文化財を含め、様々な仕事があった。地



▲出土状況

蔵田遺跡の弥生時代集落を、市民参加で整備する事業にも従事した。市民と大きな遠賀川系土器を製作・焼成し、復元竪穴住居に何度も宿泊した。ふと気付けば秋田市に就職してから10年近く経ち、30代半ばになっていた。今までは目の前の仕事をこなしていただけだったが、本当にやりたい仕事を何かやるべきではないかと感じていた。ちょうどそんな時に国の補助金で緊急雇用創出臨時対策基金を活用した事業を募集しており、そこに地蔵田遺跡旧石器時代資料の再整理事業を提案した。あっさり予算が付き、平成22年度に事業実施に至った。石器の実測図を書いてくれる人をハローワークで募集し、20代～40代の7名の女性を採用した。彼女らに珪質頁岩を目の前で割ってみせて、剥離痕の切り合い関係、実測図の取り方を一から教えた。皆一生懸命取り組み、上手な実測図を書いてくれた。彼女らの今後の人生において、剥離痕の切り合い関係を見極める能力が役に立つ日が来ることを切に願う。たくさんの接合資料が得られ、当初考えていたよりも素晴らしい資料だった。この事業で御所野台地の地形区分を検討していただいた菊池強一先生のすすめで、調査当時の土層断面の再検討を現地で行った。この時旧石器出土層位の炭化物を採取し、分析に出したが縄文時代後期のC14年代値が出た。残念だったが、気を取り直して資料と向き合った。実は調査当時に点取りで採取されていた118点の炭化物が保管されており、炭化物の出土地点から慎重に3点選定し、再度分析に出したところ、上述の約28,000～30,000yrBP(未較正)のC14年代値が得られた。菊池先生に年代値を電話で報告すると、先生は涙を流して喜んでくれた。2011年2月28日のことである。

無事原稿を入稿し校正をしていた2011年3月11日、東日本大震災が起きた。地震発生当日の夜は停電していたが、職場には発電機で灯された裸電球が一つあり、その下で校正を続けた。幸い秋田県は被害が少なかったが、宮城県鹿又先生や岩手県の菊池先生と電話が繋がらない。秋田県の電力が復旧すると東北地方太平洋側で甚大な被害があったことを知った。数日後、両先生と連絡が取れ本当にはっとした。その後、印刷会社から「紙が不足していて印刷できないかも…」と言われ、ものすごく動揺したが、なんとか紙を集めてくれて無事3月末までに印刷・刊行することができた。「こんな天変地異があったのに旧石器時代の報告書なんて…」と言われたこともあった。しかしこんな時だからこそ、この遺跡の貴重な資料を世に出し、停滞ぎみであった東北地方の旧石器時代研究を活性化させたいという思いがあった。地蔵田遺跡の旧石器の報告書を送れば、みんな元気になってくれるかも、と当時は真剣に考えていた。

報告書刊行後、長野県の中村由克氏の鑑定により、地蔵田遺跡の石斧は新潟県西部・長野県北部の特定のエリアでしか産出しない透閃石岩製で、最北の出土例であることが判明した。また、文化庁の国武貞克調査官に資料を見ていただく機会があり、それをきっかけに「2014年発掘された日本列島展」に出品することができた。全国の著名な博物館で展示されるのを見て、再整理する前は遺物収蔵庫の奥でホコリを被って眠ってい

たことを思い、感無量だった。報告書刊行はスタート地点に過ぎない。今後さらに分析を行い、様々な研究者と議論し検討をおこなっていき、この旧石器資料がもつ価値を高めたい。この遺跡を通して感じたことは、新しい遺跡を発見するだけでなく、地域に既にある資料の価値を正當に評価することも等しく大切な仕事だ、ということである。

考古学者の書棚

「岩波講座 日本考古学」1 研究の方法

横山浩一・小野山節・麻生優・佐原真・岡村道雄・藤本強・白石太一郎・山本忠尚・及川昭文・金関恕

我が家には、仕事関係で調べものをする為に購入したり、頂いたりした書籍を収納する書庫がある。その書庫の広さは3畳ほどで、書籍の入れ方を工夫しているとはいうものの、ほぼ古書店の様なありさまで、まさに日々増殖する密林のようでもある。この密林は、現代の山林同様、常に管理をまめに行わなければならない。日々の換気を行い、湿気によって本が傷む事がないようにし、季節の良い時期には影干して、虫食いや黒カビが起こらない様に気を付ける。配置も使いやすい様に本の置き場所を考えなければならない。去年の秋もこの密林に分け入り、知識の渦に飲み込まれ、迷いながら森の手入れをしている中で、ある一角に目が留まった。その一角には、考古学において必要とされる基礎的な内容の本を並べていた。それらは学生時代に、その本質的な意味は解らないながらも、先生・先輩・同級生に教えられたり、言われたりして購入したものだったと記憶している。それら本を手にとると見ると、何冊かは途中で読むのをやめてしまったものがチラホラ見られた。どうも当時の自分では、理解をする前に知識の森の中で簡単に遭難してしまったようなのだ。

その様な書籍の中で、特に目を引いたのが『岩波講座 日本考古学』である。この本は9冊からなるシリーズ本となっており、中でも特に注目するのは、『第1巻 研究の方法』である。初めて読んだ二十数年前の学生であった立場と今の自分では、その内容に対する考え方や理解の面でだいぶ違う感想となるであろうとの思いから、今回改めて読み直してみる事とした。

表紙をめくると総論からはじまり、資料論、型式論、層位論、分布論、機能論、年代決定論、調査技術論、考古学データの数量的研究に至り、世界の考古学と日本の考古学と進む。執筆されている先生も第一級の方々であり、より実践的な概説書といえる。これら各論についての詳細を述べる能力も紙面もないので、ここでは特に層位論について少し触れてみたいと思う。

この層位論であるが、たまたま最近遺構内の堆積土と遺物の出土状況について、その関係性を勉強していたと言う事もあって、目についたというのもあるのだが、ご存じの通り本論は、考古学の中で型式論と同様に、時代特定に関わる重要な領域となる分野である。しかし地質学の側から良く耳にするのは、「考古学者の地層の線の引き方の意味が理解できない」や「土層注記のしかたが地質学とはちがう」などの台詞である。考古学における地層の認識は、地質学のそれとはズレがあると言われているのだ。この点については、本書のなかでも触れられており、地質学と考古学での層位論の個々の立場の違いについて、「層位論の根本理論は明らかに地質学や古生物学が

報告書は限られた部数しか印刷できなかったもので、PDFを秋田市教育委員会のウェブサイトで公開してある。是非参照していただきたい。

http://www.city.akita.akita.jp/city/ed/cl/site_report/jizoudensite_paleolithic/default.htm

参考：秋田市教育委員会 2011 『地蔵田遺跡—旧石器時代編—』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは嶋影壮憲さんです。

著／岩波書店(1985) ————— 新宅 輝久

らの借用であるが、考古学者と自然科学者の間にかなり差があることも事実である。」と明言した上で、その原因については「自然現象中心に観察、研究する地質学と人間行動の結果としての遺跡にまつわる文化層を中心に観察、研究する立場の違いが引き起こしている」とし、さらに「これは地質学での層位論が自然層の区分において、その成因と堆積論成立の根拠を論理的に説明するのに対し、考古学は対象とする層の違いを遺物や遺構などの人為的要因とあわせて考える点から違いが現れている」とも述べられている。この差異の解消方法として、本書では、「地質学と考古学の融合が理想的な層位論の研究を保証するものになるだろう」との道筋を示している。

現在では、旧石器時代の調査では石器の出土した地層の調査・分析を、地質学の研究者にお願いするなど、学問の枠を越えた行動が大いに行われているのは周知の事実となっている。また火山灰層など年代特定の鍵層の判断についても、同様な活動が頻繁に行われており、本書が発刊された当時より、この分野での『仕事分担』は活発に行われていると言ってよいのかもしれない。だからと言って、層位の分野については、地質学との学際研究を主眼に据えた活動だけで良いのであろうか。当然、以前からも考古学側独自の目線での解決方法については存在していた。本書以外の見解では、地質学と考古学の層位論(層序区分)に関する専門的な教育、研究の違いが問題を発生させているという問題提示がある(林1973)。

現在の状況はどうであろうか。日本考古学協会が全国の大学の講義の一覧を公開しているが、それによると明らかに堆積学・層位論などを唱った講義はほとんど見られないものの、それらを包括する講義名のは多数存在する。また近年大々的に改訂された文化庁監修の『発掘調査のてびき』では、層位に関する記述も詳細なものとなっている。1970年代や1980年代当時よりは、層位論を取り巻く環境は解消されつつあるのかも知れない。しかし、依然として、最も重要な遺構内の埋土(覆土)の堆積状況について論理的に述べられたものが見られない状況は変わらないようである。

本書の最後で書かれている『研究者自身の態度如何がすべてを左右する』という言葉が、こころに響く。

林 謙作 1973「層序区分」『物質文化』21 物質文化研究会

アルカ通信 No.139

発行日 2015年4月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>